第８回の専門講座は午前２講座、午後２講座の計４講座を実施しました。志望校種・職種に関する専門的な知識や実践を多く学ぶことができました。また、小学校志望の塾生が養護教諭や総合支援学校の講座を受講するなど、採用前に他校種・職種のことや教職員の連携の大切さを学べるのも京都教師塾の強みです。学校教育というものを広い視野でとらえながら、今後も自身の学びを深めていきましょう。

「高等学校における教師の実践」
講師；学校指導課
安川　隆司　指導主事

～塾生のレポート集より～

今日の講座では、今行かせていただいている学校実地研修と関連させながら聴くことができた。中でも印象に残っていることは、三つある。一つ目は、教科の専門性である。研修校は、テスト週間前の時期にあたり、入試前の三年生の授業見学に入らせてもらった。その中で、先生方の専門性を目の当たりにした。入試問題に取り組む生徒から「この問題を教えてほしい」と言われたときに、私の場合、すごく時間がかかってしまったり、解ききれなかったりした。しかし、先生は、一度問題に目を通しただけで問題のポイントや解法のヒントを適切に示され、自分には専門性がまだまだ足りないと実感した。そのため、入試問題に取り組んでみて専門性を高めること、また、問題を知ることで最終的な到達目標を明確にした上で授業づくりを行っていきたい。二つ目は、選択の幅を広げるための期間であることだ。高校での学びは、中学校での基盤の上に成り立つ。また、そういった学びは、生徒が将来やってみたいことに直接つながるものや、高校生、大人になってから新たな目標が生まれたときに役立つものなど様々である。まず、中学校の各教科においてバランスよく学びの基礎を作ることによって、その後の選択の幅が広がることを教師が分かった上で、日々の授業を行い、日頃からその大切さを生徒に伝えていきたい。これが、なぜ勉強するのかを理解することに繋がるのだろう。三つ目は、生徒自身が自分の将来について本気かどうかを見極め、本気で取り組める気持ちになるまで対話していくことだ。研修校のあるクラスで来年に受験を控えた生徒が、現段階で既にあきらめてしまっていることに、私はとても引っかかっていた。残りの一週間という短い期間の中で、最後のテストに向けて、学校現場の先生がその生徒とどのように接し、向き合っているのかを見て学びたい。また、その中で、自分ならどうするか、どんな言葉をかけるのかを考えていきたい。そして、三年生と接する機会では、自分の将来についてどのように考えているのか等、今後について聞くことができると思うので、積極的に関わっていくようにしたい。

～レポート担当スタッフのコメントより～

中学・高校では、生徒たちはその教科のスペシャリストとして先生を見ているでしょう。「生徒の期待に応えることが信頼に繋がる」と、分散会でもたくさんのグループで討論されていました。“自分の教科理解に対する「謙虚さ」と同時に「自信」も必要であり、加えて教科に対する「敬意」もいる”とある先生がおっしゃっていました。生徒には、教科の力をつけると同時に、魅力も伝えてほしいです。中学、さらに高校は、生徒がこれから先、どう生きるかという課題に向き合い、思い悩む時期でしょう。安川先生は、「生徒にどのようになってほしいかを思い描き、選択肢を広げ、可能性を見出す」ために生徒への見取りの大切さを言っておられました。生徒一人一人の未来への選択肢を広げられ、確かなものにできる教員を目指したいですね。

「総合支援学校における教師の実践」
講師；総合育成支援課
稲岡　義徳　副主任指導主事

今回の講義を通して、子どもたちの「できる」を増やすために、支援をする上で特に重要だと学んだ点が二つある。まず一つ目は、児童本人が求める配慮を理解することだ。支援をする側と支援を求める本人で理解に違いがある場合、いくら子どものためを思った支援であったとしても、本人の意欲を低下させてしまう可能性がある。子どもたちの「できた！」という達成感や成就感につながる支援を行うためにも、日常生活を通して密なコミュニケーションを心がけ、子どもたちが何を求めているのかを把握しておくことが大切だと学んだ。そして、子どもたちが求める配慮につながる状況づくりや支援を意図的に設定することが根拠のある指導だと学んだ。

二つ目は、支援の引出しを増やすことだ。学生ボランティアでの経験や学校実地研修を通して、同じ LD 等の発達障害がみられる場合でも、子どもたち一人一人で特性は違うということを感じた。そして、実際の現場で先生方が行われている支援の方法も様々であることを学んだ。このように、同じ障害であっても子どもたち一人一人で適切な支援の方法は異なり、試行錯誤を繰り返すことで、子どもに合わせた適切な支援のあり方にたどりつくと学んだ。

これらの学びを通して、まずは障害や困りがある児童の特性やひっかかりを知り、その上でどのような支援の方法があるのか、子どもに合った適切な支援の方法を選択できるよう知識や実践から得た学びを増やしていきたい。

障害のあるなしに関わらず、教師の思い込みや決めつけで一方的にあれこれと押し付けてはいけないということを改めて学べましたね。障害や困りのある子どもたちも何らかの方法で意思表示をしています。話せなくても動けなくても、また元気すぎる様子であっても、黙っていてもです。そのためにも子どもたち一人一人をしっかりと見ていくことが大切です。また、いろいろな方法でのコミュニケーションも大切ですね。保護者との情報交換も有効です。「試行錯誤」が大事ですね。教師として自分なりに考えた上でチャレンジしては、様子を観察し、改善してまたチャレンジする。そういったことの繰り返しです。また、障害の基本的特性や子どもの発達年齢ごとにみられる特性などは、今、自分でも学んでいけることです。

稲岡先生は教師塾4期生の大先輩です。当時のレポート集を大切に残しておられ、教師塾生であった頃の「思い」が、現在にもつながっているとおっしゃっていました。

みなさんのレポートも学びがつまった一つの「作品」であり、世界に一つだけの宝物です。将来教壇に立った時にも、この教師塾での学びを生かしてもらえたら嬉しいです。

「もとめられる養護教諭像」
講師;体育健康教育室
岩本　順香　副主任指導主事

全体会で今回最も印象に残ったのは、クリティカルリーディングのお話である。消火用バケツとこぼれた水の写真、コーナークッションのついた棚の写真などを先生が見せてくださったとき、自分の観察力不足を痛感した。日常的に当たり前に視界に入ってくる学校の景色に対して、子どもにとって危険な場所はないか、改善できることはないかと常にアンテナを張って観察したいと強く思った。観察力は環境に対してのみでなく、子どもたちの様子やその変化に対しても向けることが大切である。その際、自分一人だけで行うのではなく、管理職、学級担任、栄養教諭など他の教職員と連携して観察し、情報共有を行うことで、より的確な判断に結びつけたい。

分散会では、養護教諭志望二人、小学校教諭志望二人とバランスのとれた構成人数で、どう協力して子どもの健康を守るか深く話し合うことができた。そこで印象深かった話は二つある。一つ目は、小学校教諭志望の方が。怪我の処置や心のケアに意欲的で、「できるようになりたいから教えてほしい。」とおっしゃってくださったことである。そのとき、連携というまだ自分にとってぼんやりしている言葉が少し見えるようになった気がした。その言葉が純粋に嬉しかった。二つ目は、少し具体的な話だが、保健教育を学級担任にしてもらう際、養護教諭が積極的に意見を出し、授業の落としどころまで主体的に決める大切さについての話題となり、とても印象深かった。

岩本先生のお話、分散会での仲間との話し合いを今後に必ず繋げていけるよう学び続けていきたい。

これまでの講義の中でも、子どもに寄り添うことや、教職員と連携をとることの重要性が話されてきました。今回はここにクリティカルリーディングとして、対象をよく観察することについて、より深い学びがあったことと思います。感覚的な意見ではなく、客観的な事実・証拠。そこから分析し、その結果を統合して解釈を引き出す、その解釈に加えて独自の考えを引き出すからこそ、信頼性や説得力のある提案もでき、「確かな内容」でも教職員との連携も生まれてくると思います。それぞれの教職員にそれぞれの専門性が求められています。分散会での内容は自身にとっても大きな刺激となったことでしょう。

第８回教育学講座　分散会の様子

2/11 午前 高等学校

2/11 午後 総合支援学校

「もとめられる栄養教諭像」
講師；体育健康教育室
増田　真弓　副主任指導主事

今回の講座では、栄養教諭としてたくさんのことを学びました。特に、今後大切にしていきたいと感じたことは「子どものため」を軸にもつことです。講座を通して、改めて栄養教諭の業務は多岐に渡り、また、どの業務も様々な人と連携して行うものだと思いました。そして、その中で「子どものため」という軸は絶対にブレてはいけないと感じました。グループ協議の際に、「栄養教諭の仕事は足し算だ」という話を聞き、自身が「子どものため」という思いをしっかりもっていれば、その足し算はどんどん広がっていくと思いました。また、栄養教諭は業務の中で、担任の先生や給食の調理員さん、保護者と連携する必要があり、その際、私はうまく関わりをもつことができるか不安な気持ちがありました。しかし、それも全ては「子どものために」に繋がっており、何も考えずコミュニケーションをとるのではなく、しっかり目的意識をもって取り組みたいと感じました。今回の講座で難しいと感じたことが、栄養教諭として学校で行った食育を実際の生活に落とし込んでもらうことです。やはり、日常生活における食事は、家庭で過ごす時間が多いため、いくら給食で栄養バランスの良い食事を摂っても、家庭での食生活が変わらなければ根本的には解決できません。自身が栄養教諭になった際には、学校で学んだことをしっかり日常生活に落とし込むところまで指導に取り組みたいです。そして、栄養教諭として、「子どものため」を考えた際に、やってみたい取組等は、積極的に声に出して自身からどんどん動いていきたいです。

指導主事には講義だけでなく分散会にもご一緒いただき、少ない人数ながらも貴重な機会、充実した時間になりましたね。多岐にわたる仕事、様々な人との連携。当然不安もあると思いますが、全て「子どものため」。命、成長に関わる大切な食育です。軸がブレることなく進めてほしいです。さらに「足し算」で仕事の幅を広げられたらステキですね。「実際の生活に落とし込む」ことは容易ではありません。誰に相談し、どんな方法で家庭へ発信するか、積極的に動いてください。子どもへの発信もたくさん工夫できますよ。給食大好きな子どもが増えますように。給食大好きな私からのお願いです。

第８回教育学講座　分散会の様子

2/11 午前　養護教諭

2/11 午後　栄養教諭

2/14 補講　高等学校

2/14 補講　総合支援学校

子どもたちの今と未来のため，社会のあらゆる場で
「子どもを共に育む京都市民憲章」を実践しましょう！
京都はぐくみ憲章